



ヨロツパ旅路

丹羽恒夫

12. デュッセルドルフのあれこれ

デュッセルドルフは活気のある町で、ここに2週間程滞在したので私にとってハンブルグと共に長期間滞在したなじみの深い町となった。

ここは機械工業の中心地なので日本商社も多く、大小とりまぜ30社位支店を設けたり駐在員を置いたりしているそうで、町を歩くと時々日本人に会ったりする。東京銀行の支店もあり、翌日より私の滞在した Brosen Hotel もこの銀行の近くで、この町の賑かな通りである Königs Alle や Berliner Alle のすぐ近くにある。

翌日から私の居室となった部屋は天井の一部が断熱した、ヨーロッパ特有の出窓のある屋根裏に近い室である。ホテルの受け付けは若い男であるが、日本人が良く泊るとみえて、変なアクセントの日本語で「おはよう。」「ありがとう。」とやっている。

朝食はホテルの食堂でとるが、昼夜食はこの食堂は営業していないので、外でとることになる。朝食は大抵のドイツのホテルでは、その食堂でとることになって居り、若しとらなくても1~2 DM 位基しい時は朝食代をとられることになっているから注意を要する。

朝食はパンとバター又はジャム、飲み物はコーヒー又は紅茶で、テーブルにはパンがザルみたいな入れ物に山盛りにしてあり、ジャムも置いてある。客が来るとバターと飲み物をもってくる。パンは表面の硬いパンでとても美味であきない。トーストは英国人以外はとらないようである。バターの量は日本のそれより多く、どんなものかと他の客のやり方をみていると表面にゴツテリ塗り付けて居り、これでは風邪もひかないわけである。以上が定食でその他注文により卵とかジュースをつけるのである。

ドイツでは飲み物と云えばビールで、水道の水は質が悪いので飲まない。水道は専ら洗濯と水洗便所に使用され飲用にならないそうである。

ビールはさすがに朝食のときとる人は少くないよう

であるが、あとはすべてビールで、夜は勿論のこと昼でもビール、愉快なのは工場のプレスなどの係は場所を離れないで近くで食事をとっているが、パン、チーズの他にビール1本をもってきている。

吾々にとって好都合なことは、このようにビールが一般化しているので、食堂に入ったらまずビール1本とやって、あとはメニューをみてゆっくり品定めの上、注文できるので、食堂では専らビール1本をくりかえした。

私の室はシャワー付で、トイレは各階にあるのを共用することになるが、エレベーターの傍で私の室より約10m位の所にあり、寝巻で廊下を歩くことはエチケットに反するし、まわりをみて駆け足で飛びこむのはどうかと思うし、行きはよけれど帰りはなことになるので考えた末、スプリングを着て歩くことにした、その後トイレ共用の時は専らこういうことにした。下の話になったので、ついでに一つ、ドイツのレストランその他の所でトイレは何も書いてないで唯扉にDとかMとか書いてあることが多い。これは女性用、男性用の略字で、これで便所であることを示している。

又大きなレストランの便所では体格の良いおじさんが番をしていることが多い。そして皿が置いてあり、大小に応じていくらかチップを置く、小の場合は大抵10 pf (約9円)で、そうすると手を洗ったあとタオルをウヤウヤしくささげて渡してくれる。漫画的で愛嬌があるが、最初の中は体格がよいので気味が悪かった。

到着の翌日打ち合せのため村上氏の駐在している Franz Kirchfeld GmbH を訪問する。同社は Königs Alle の次の通りである Breite Str. にあり、大きなビルディングの並んだ中の一つである。

Kirchfeld 社では日本担当の Von der Heide 氏と P. Weiler 氏が待って居り、日本で使用される木材工業関係の機械について質問された。更に滞在中に

見たい所をきかれたので Holzmesse を中心に製材工場とその他木材関係の所をみたいと話した所、この付近では余り大きな工場はないが Duisburg にある製材工場を見せてやるとのことで、午後 3 時より雨の中を自動車を出掛けた。

この製材工場は Krammer & Von der Laden と云う製材工場で製材と床板を製造している。

この辺は南ドイツにくらべ規模は小さいそうで堅鋸は 1 系列である。原料材は輸入のものも多いが、製材、床板は輸出しているそうである。

製材工場は年産 10,000m³/年でフローリング生産量は 500,000m²/年である。

製材では一台目の堅鋸盤で両耳を落し 2 台目で板挽をする。又ブナ等では丸のまま板挽してしまい 1 枚毎に棧をはさんで、その原木の形のままで天乾しているものもあった。乾燥終了後そのまま原木の形にして針金で梱包して送り出すそうである。

地下では製材機の下に振動篩をつけて粗い木端とか大きな皮は篩い落し、鋸屑だけ篩の下よりファンで外の鋸屑倉庫へ送られている。

鋸屑の用途をきいた所、燃料として使用或は売っているそうで、用途は余りない。デュッセルドルフに Wegelt 博士が居るからそこで聞いたらいよいよであろうとのことである。

製材工場は運搬のものを除いて実際製材しているものは 2~3 人だけである。

床板用の三方機は Bottcher Gossner 社製で最高 120m/min の送りであるが松材は普通 50m/min の送りで運転しているそうである。ここより出たカッター屑は粗いものはパーティクルボード工場に売るか細かいのは鋸屑同様燃料として使用されるそうである。雨足も強くなり北欧の晩秋は暮れ易いので、早々にしていとまをつけた。

ホテルに帰って村上氏と飛行場で手にいれた免税のスコッチウイスキーを一杯やりながら明日の計画をねった。Wegelt 博士はどんな人か知らないが、鋸屑のことは彼にきけと云うのだから、一応行ってみようとのことになり翌朝電話して都合をきいてもらうことにし、デュッセルドルフの第 2 日目を終ることとした。

翌朝 Kirchfeld 社と出掛けて見ると Weiler 氏が電話した結果博士はこの方面のボスらしく Holzmesse の主催者側であって忙しいから午後 12 時から 1 時までの間の 30 分間、お会いしようとのことで、早速その時間に伺うこととした。同氏は木材の加工のコンサルタントであり、建築用木材の利用についてのパンフレット等を作って居る。大分のおじいさんで

イツ人特有の頑固な感じのおじいさんである。

開口一番、機銃のような早口のドイツ語でやられ、考える暇もないので同行の Weiler 氏に英訳してもらいながら話すこととした。

まず鋸屑の用途と最近 Holzsaagemehle Platten (鋸屑ボード) と云うことが聞かれるが、このことについて説明してくれと聞いた所、すでに吾々としても知っている、あたりまえの話であったので期待はずれした形であった。彼の云う用途としては

- (1) 燻煙として利用、即ち燻製品を作るため
- (2) コンクリートに混ぜる
- (3) ブリケットとして燃料にする。
- (4) 木材糖化工業に使用アルコールを製造する。

ドイツでは戦時中実行したが現在はやっていないと彼は云っていた。

- (5) 木ガス用 - 自動車燃料であるが現在は性別していない。

Holzsaagemehlplatten については Braunschweig の大学に居る Dr. Krauditz にきけとのことである。

また製材歩止りはどれ位であるかときいた所が針、広ともに 60~70% 位だそうである。

30 分との約束なので早々にわかれをつけて町に戻ってきた。

3 日許りデュッセルドルフの町も例によって地図を片手にあるくと主な通りは大体わかり、郵便局も駅も

1 人で歩けるようになると、そろそろ茶目気が出てあちこち歩いてみたくなる。表通りのショウウインドはストックホルムと同様に照明は美しく、戦後の建物が大部分なので近代的でありきれいだである。店は 6 時すぎになるとしまるので買物は出来ないが、照明によって品物の細かい点もよくわかり結構楽しめる。その代りなかに入ると買うお客さんだけでひやかしのお客はいない(デパートは別だが)

又、大抵の店では会計係と売場は別で品物を買うと伝票が切られ、品物は包装係又は包装して会計係の所に届けられ、金を払うと伝票にスタンプが押され品物をもたらう仕組みである。面倒になると私は外国人であると云う特権を利用してわからない顔をしていると、親切心を出してちゃんと品物をつつんでくれるし、金も会計までとどけてくれあちこち歩かないですむので、面倒になるとこの手を用いた。